3　情報通信手段の普及・多様化[7]

近年の情報通信手段の普及は，子供の読書環境にも大きな影響を与えている可能性がある。例えば，児童生徒のスマートフォンの利用率は年々増加しており（平成26年度：小学生17.1%，中学生41.9%，高校生90.7%，平成27年度：小学生23.7%，中学生45.8%，高校生93.6%，平成28年度：小学生27.0%，中学生51.7%，高校生94.8%，平成29年度：小学生29.9%，中学生58.1%，高校生95.9%），個人が所有する通信ゲームやパソコン等も以前にも増して子供たちの身近に存在するようになっている。また，SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）等情報通信手段（コミュニケーションツール）の多様化も近年の特徴である。

[7] 数値は，平成29年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」（内閣府）から。

第２章　基本的方針

Ⅰ　子供の読書活動に関する課題

子供は，読書を通じて，読解力や想像力，思考力，表現力等を養うとともに，多くの知識を得たり，多様な文化を理解したりすることができるようになる。また，文学作品に加え，自然科学・社会科学関係の書籍や新聞，図鑑等の資料[8]を読み深めることを通じて，自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得し，更なる探究心や真理を求める態度が培われる。

近年，生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化し，予測が困難な時代になっている。子供たちには，様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築できるようにすることが求められている。

一方，情報通信技術（ICT）を利用する時間は増加傾向にある。あらゆる分野の多様な情報に触れることがますます容易になる一方で，視覚的な情報と言葉の結び付きが希薄になり，知覚した情報の意味を吟味したり，文章の構造や内容を的確に捉えたりしながら読み解くことが少なくなっているのではないかとの指摘もある。

このような状況にあって，現在，学習指導要領等の改訂や高大接続改革が行われているところである。その中で，読書活動は，精査した情報を基に自分の考えを形成し表現するなどの「新しい時代に必要となる資質・能力」を育むことに資するという点からも，その重要性が高まっていると考えられる。

第三次基本計画においては，子供の不読率（１か月に一冊も本を読まない子供の割合であり，平成24年度には小学生4.5%，中学生は16.4%，高校生は53.2%であった[9]。）をおおむね５年後に小学生３%以下，中学生12%以下，高校生40%以下とし，10年間で半減させる（平成34年度に小学生２%以下，中学生８%以下，高校生26%以下とする）ことを目標としていた。本目標下において，平成29年度の不読率は小学生5.6%，中学生15.0%，高校生50.4%であった[9]。

年により不読率の数値に変動はあるものの，これまで中学生の時期までの子供については各地域で様々な読書活動の推進に関する取

[8] 電子書籍等の情報通信技術を活用した読書も含む。
[9] 第63回「学校読書調査」（公益社団法人全国学校図書館協議会及び株式会社毎日新聞社）